

「新しい存在論」を巡る社会学ノート
— 脱人間とモノ志向 —

三 上 剛 史

A Sociological Essay on “New Ontology”
— Things, Human Beings and Society —

Takeshi MIKAMI

「新しい存在論」を巡る社会学ノート — 脱人間とモノ志向 —

三 上 剛 史

A Sociological Essay on “New Ontology” — Things, Human Beings and Society —

Takeshi MIKAMI

要 約

M・フーコーが「人間の終焉」を論じ、ポスト構造主義とポストモダンの思想群が人間「主体」の概念を脱構築し無効化を主張して久しいが、近年の新たな傾向は、単に人間と主体を「近代」の産物として否定することから、更に一歩進んで、人間以外の「モノ」(事物)を注視することにある。

これは、モノと人間とを同等のアクターあるいは主体と見なす視線であり、アクター・ネットワーク理論、人類学におけるいわゆる「存在論的転回」、哲学における「新実在論」、「オブジェクト志向存在論」などの一群の思潮があげられる。

本稿は、これらのいわゆる「新しい存在論」と呼ばれる一群の理論について、その台頭が意味する社会学的含意を整理しようとするものである。そこには、哲学、人類学、社会学などの領域が関係し合うが、本稿は社会学からこの現代的現象にアプローチする。現段階ではまだ粗削りなノートに過ぎないが、「新しい存在論」の理論構造を押さえるところから入り、後に一定の知識社会学的整理を可能にするための準備作業としたい。

キーワード：新しい存在論、ANT、存在論的転回、フラット・オントロジー、準客体

序

本稿は、近年になって注目されつつある、いわゆる「新しい存在論」と呼ばれる一群の理論について、その台頭が意味する社会学的含意を整理しようとするものである。これらの理論群には、哲学、人類学、社会学などの領域が関係し合うが、本稿は社会学からこの現代的現象にアプローチしたい。

本稿に続く次の段階では、モノと人間そして社会にまつわる新たな論点について、その基本的構造と時代性を知識社会学的観点からまとめてゆきたいが、現段階ではまだ粗削りなノートに過ぎない。学問的にも哲学や人類学などに亘るものであるから、社会学的な独断は許されないが、まずは、それらの理論構造を押さえるところから入る。一定の知識社会学的整理を可能にするための準備作業である。

このような形で断章的な論考を提示することには理由がある。筆者はこれに先立つ論文〔三上、2019〕において、アクター・ネットワーク理論を社会学的に再定位するという作業を行ったが、そこで予告された新たな論点は、「モノ」と《主体／客体》図式を再検討するという課題であった。

B・ラトゥールは「モノ」と主体・客体との関係を、M・セールに倣って「準客体」という形で捉えているが、社会学の理論史に沿って考え直すならば、G・ジンメルやM・モース、M・フーコー、N・ルーマン、U・ベックなど、踏まえておくべき幾つもの論点がある。本稿は、その課題に進む際の一里程碑として、近年の「モノ」に関わる諸論点をまず整理しておこうというものである。

1. 「脱人間」と社会学

社会学は近代社会の自己意識の産物とも言われるが、そこでは人間が主体であるという世界観のもとに理論が形成されてきたと言っても過言ではない。(非人間的な)システムも人間達が作るものとして、そして疎外的に作用する「社会」もまた、人間的意識と行為の集合体としてとして捉えられてきた。

M・ウェーバーの「主観的に思念する」行為主体、そしてE・デュルケームの「集合表象」や「道徳的個人主義」もまた然りである。社会学的方法論の二派を代表するとされる両者の学説において、アプローチの仕方は異なりつつも、人間的行為と意識あるいはその集合という点から個人と社会の関わりを問うという点で、共通の基盤に立っている。

ウェーバーとデュルケームを総合して20世紀社会学の主脈を作ったとされるT・パーソンズの社会システム理論もまた、行為する人間の価値意識と動機、目的・手段選択などをその基本的要

素とする主意主義的行為論である。その後のアンチ・パーソンズの社会学理論群や「ポストモダン」期の新しい理論群も、例えばシンボリック・インタラクショニズム、A・ギデンズ、ベック、そしてJ・ハバーマスなどがそうであるように、多くは（ルーマンなどを除けば）、人間中心主義的な視点を捨てることはなかった。

そのような理論傾向に対して、M・フーコーが「人間の終焉」を論じ、ポスト構造主義とポストモダンの思想群が人間「主体」の概念を脱構築し無効化を主張して久しいが、近年の新たな傾向は、単に人間と主体を「近代」の産物として否定することから、更に一歩進んで、人間以外の「モノ」（事物）を注視することである。モノと人間とを同等のアクターあるいは主体と見なす視線である。ラトゥールのアクター・ネットワーク理論、人類学におけるいわゆる「存在論的転回」、哲学における「新実在論」、「オブジェクト志向存在論」などの一群の思潮があげられる。

これらの理論群は、近代的な人間中心主義はもとより、近代を批判したポスト構造主義、構築主義なども超えようとする新しい立場として登場している。既に古典的にはM・モースやG・タルドの研究がそれに先鞭をつけていたと言えるし、近年ではルーマンのシステム理論が（意外にも）ラトゥールに通ずる脱人間主義の先駆けとして存在はしている*。ただ、はっきりとした形で、社会理論から「人間」の特別の地位を篡奪し、モノに光を当て、モノと人間とで作られるシステムあるいはネットワークとして「社会的なもの」を再考する姿勢が顕著になったのは、ごく最近のことである。

*ラトゥールとルーマンの類似性を指摘したものとして、例えば〔Müller u. Lorenz, 2016〕。ここでは、多くの相違点にもかかわらず、両者が共に「社会」という概念を物象化せずに、「どのようにしてコミュニケーションと実践を通して社会が生み出されるのかを追究することが重要である」（ibd., S.50）とする点で一致していると述べている。

2. 「新しい存在論」

まずは新しい理論的思潮として、「新しい存在論」（New Ontology：以下、NOと略記—この用語はA・ピッカリングが使用し始めたもののようである。）という名称のもとにまとめられる理論群を概観し、それらがいかなる点で新しく、またどのような観点が「新しい」視点として共有されているかを確認しておきたい。

これらの新潮流は、一般に「新しい存在論」と総称されているが、その中身は、「新実在論」、「思弁的実在論」、「オブジェクト志向存在論」、「人類学の存在論的転回」、「アクター・ネットワーク理論」などと呼ばれる一群の理論である*。

*「新しい存在論」(NO)とは別に、「フラット・オントロジー」(flat Ontology)という用語も存在する。G・ハーマンによれば、この言葉は1970年代に、実証主義を批判する意味で用いられたが、2000年代になると、全く逆の意味で、全ての存在者が同等に扱われなければならないという意味で使用されるようになった。その最たる例がラトゥールだと言う (Harman, 2011, p.177)。

但し、本稿の目的は、新實在論の哲学的吟味や、人類学における存在論的転回の妥当性について議論しようとするものではない。アクター・ネットワーク理論（以下、ANTと略記）についても、その方法論的妥当性よりは、脱人間主義とモノへの注視という観点にもっぱら議論を集中する—ANTへの支持や批判については既に多くの議論があり、本稿に先立つ論考として、社会的との関わりについては〔三上、2019〕でも論じている。詳細はそちらを参照。

本稿がこれに続く論考において最終的に目指すところは、何故にこれらの新理論群は近年になって、ほぼ時を同じくして多方面で語られ始めたのかを検討することである。NOの理論群には、それぞれに深い繋がりを持つものもあれば、全く別の文脈から形成されたものもあり、結果として事後的に相互の類似性を確認しているものも少なくない。言うまでもなく、それらの理論群には大きな共通項と数々の小さな相違点が存在するが、本稿では、大きな共通項に着目し、なぜそれが共有されているのかという知識社会的関心に議論を引きつけてゆきたい。

3. モノと「準客体」：アクター・ネットワーク理論から

モノとそのネットワークへの注目を社会的に検討する際には、ラトゥールらのANTから始めるのが分かり易い。ANTは他のNO理論群と影響関係にあり、相互に批判し合う部分もあるが、モノへの注視と脱人間主義という観点を共有している。

ANTは、人間とモノの両方を含めた様々な要素の協同体 (association, collective) としてのネットワーク分析から始めようとする理論であり、社会・諸組織・諸主体 (agents) そして機械など全てが、多様な素材（単に人間だけではなく）のパターン化されたネットワークの帰結であるとする。それゆえに「社会的なもの」(the social) は「非社会的な諸素材の結合における、微妙な変化の内に辿られねばならない」(Latour, 2005, p.36)。

ANTの議論が、「理論的・方法論的観点においては、社会構築主義的課題の完遂とラディカル化にあり、…経験的観点においては、モノそのものへと突き進むことを要請するものである」(Schulz-Schaeffer, 2000, S.195) とするならば、本稿では、主に後者の「モノそのもの」に志向する態度に注目したい。

モノ・客体とそのネットワークに注目する理論において、「準客体：quasi-objet」という概念は特に興味深い。この概念は、M・セールの〈準客体／準主体〉をラトゥールが援用して立てた概念である。

セールは「準客体」（準客体、準対象）について、ボールを使ったゲームを例として述べている。ボールというモノ（客体）がプレイヤー間でパスされることによって、ボールを中心としてゲームが展開される。ここでのボールは単なる客体に留まらない準客体となる。ボールという「この準客体は客体ではない。にもかかわらず、それは客体の一つである。…それはまた、準主体である」（Serres, 1980, p.403）。プレーをするということはプレイヤー達がボールの属性になることを意味し、ボールのために書かれた規則に服従する。

客体は、近代人が固定化した〈主体／客体〉二分法の一方にある訳ではない。人間も非人間も、様々な要素が相互に関係し合って形成するハイブリッドなものであり、ネットワークの中にある。そのような協働のプロセスにおいて、客体は単なる「モノ」ではなく、主体と客体の両要素を内包した存在となる。それゆえにラトゥールは、セールに倣ってこれを準客体と呼んだ。

4. 人類学における存在論的転回とモノ

人類学分野においてもNO的潮流が存在する。ここで多くを語る余裕はないが、ANTとラトゥールとの関係で、簡単に触れておかねばならないだろう。人類学においては、『物を通して考える』（Henare, et al., 2007）という符牒で表される、いわゆる人類学における“存在論的転回”がある。その先駆者でありまた、理論形成において中心的役割を果たしてきた研究者の一人がM・ストラザーンである。ヴィヴェイロス・デ・カストロなどにも言及すべきではあるが、ここではストラザーンを参照しながら、ANTとも関わらせながらNOの特性を考えてみたい。

人類学の存在論的転回（転換）については、既に多くの指摘があるが、ANTの科学論とストラザーンらの理論的刷新が同じ時期に登場したことに注意せねばならないだろう。

『部分的つながり』（1991／2004）の中でストラザーンは、モノを単に意味を運ぶ記号として見るのではなく、モノそれ自体が意味であるという研究態度を求めている。「包括的な原則やコアとなる中心的特徴の探求を強いる分類学や配置とは異なるイメージを要求する」（Strathern, 2004, p.xx）。

そしてポストモダニズムの後、「我々は、物事を異なったように見ざるを得ない文脈の内に生きている」と言う（ibid., p.38）。読み易いとは言えないストラザーンの文章に社会学的補足をつけるなら、主体と客体という二分法が先にあるのではなく、「自由に使える道具を通して我々はその用途に気づくのである」（ibid., p.40）ということになる。我々が“主体的”だと思い込んで

いる事象も、実はモノ（客体と思い込んでいるもの）によって形作られているという指摘である。

モノだけではなく人間にも同様の観点が及ぶ。パプアニューギニアを舞台としてスラザーンが指摘するのは、「人間（persons）とモノ（things）との境界は事実上、存在しないということであり、…人間はモノに対立するのではなく、モノによって拡張され得るものと考えられている」（Gad & Jensen, 2010, pp.67f.）。

ここで我々はスラザーンとラトゥールという「二人が期せずして同時期に導入した革新的な議論を注視せざるをえない。人間と主体に対する徹底して関係論的な認識である。…人間以外のモノや人工物を同等な要素として組み入れる点」（春日、2011、14頁）である。

ラトゥールもスラザーンも、人間とモノという二分法を退け、それらが実在であるかのように見えたとしても、それは特定の諸関係が相互に作り出す効果に過ぎないと考えている—スラザーンは、ラトゥールを含め、人類学者が「ハイブリッド」や「ネットワーク」、「創られた文化」といった概念ににげこむことを批判する」（松村、2011、65頁）。

5. 「新実在論」と「オブジェクト志向存在論」

ANTや「存在論的転回」に見られる「モノ」志向の思想的裏づけとして近年になって登場したのが、「新実在論」などの哲学的理論群である。哲学・思想分野で近年話題になっている新実在論的潮流について、その内容をここで総括することは難しい。理論的には必ずしもまだ十分に練り上げられたものにはなっておらず、これから彫琢されていくべきものと見受けられる。

ただ、その中には、現段階でも注目せねばならない新たな視点が存在していると考えられる。そこで本稿では、その中の幾つかを取りあげ、「モノ志向」という限定的観点から接近することにした。

この哲学的新潮流は、それ以前のポスト構造主義と構築主義を批判しつつも、一定の形で伏線として引継ぎ、いわゆる「ポストモダン」の思想群とは違った形で「近代」を批判するものである。主として2000年以降（人類学の存在論的転回とANTの離陸はもう少し早い）になって興隆したこれらの立場は、2010年代になってにわかに注目を集め始めたようである。

ANTと人類学の転回については既に概観したが、それ以外の思想的立場の全てに言及することはできない。哲学・思想的観点から上記の新思潮を紹介する文献は幾つも存在するので（『現代思想』2019年など）詳細はそちらに譲りたい。ここでは主に「新実在論」、と「オブジェクト志向存在論」（そして「思弁的実在論」）について、それを代表する論者を取りあげ、モノ志向という点でそれらがどのような通底項を有しているかを見ておきたい。

6. 相関主義批判と構築主義批判：フェラーリス

最初に「新実在論」(New Realism)と呼ばれる立場の、とりわけM・フェラーリスの説を取りあげたい。フェラーリスを扱う理由は、新しい存在論的主張を早くに唱え始めた論者であり、世代的にもポストモダン論世代に近く、ポストモダンの思想との繋がり如何という点で、他の若手の論者よりも分かり易い立論形式をとっているように見えるからである。

「新しいリアリズム：ショート・イントロダクション」(Ferraris, 2015)において、フェラーリスは新実在論の視点を要約的に開示している。要点を拾ってゆこう。

フェラーリスの標語は「ポストモダニズムからリアリズムへ」である。それはデカルトとカントに由来する構築主義(constructivism)と、フーコー的な「知=権力」論への批判でもある。ここでフェラーリスが指示する新たな存在論的仮定は、「モノ(something)は思考によって構成されるのではなく、思考が生じる以前に与えられ(given)ている」というものである(Ferraris, 2015, p.146)。

新実在論の出発点は、存在論と認識論の混同を脱することにある。この混同は「相関主義」(correlationalism)として批判され、近代哲学は思考と存在の相関関係だけを扱えるとして、存在そのものについては語るができないという考え方を基礎にしていたと言う。

フェラーリスによれば、デカルトとカントの基本的仮定は以下のことにある—「我々は自身のコギトとは直接的関係にあるが、世界とは媒介された関係にしかなく、…リアリティの全体はマインドに依存したものになる」(ibid., pp.144f.)。

我々と世界との媒介は思考と感覚によって行われるのであり、かくして独立した世界の存在は承認されるが、我々はそれを知り得ないことになる。このような存在論と認識論の混同によってもたらされた世界の不安定性は、「数学」と「アプリアリナ総合判断」によって基礎づけられねばならなかった。

その態度は「客体ではなく主体から出発し、…モノそれ自体がどのようにあるかということよりも、それが我々に知られるためには、モノはどのように作れているべきであるか」を問うものとなった(ibid., pp.147f.)。

この相関主義批判に加えて、フェラーリスが強調するのは構築主義批判である。次項で取りあげる「思弁的実在論」のQ・メイヤスーらは、相関主義が基礎にあったことをもって近代哲学を批判しているが、フェラーリスは構築主義こそが近代哲学の基軸を成していたと考えている。単に主体が客体と相関するに留まらず、主体による構築の結果として客体を捉えるという点が問題だったのだということである。

新しい存在論における近代哲学批判においては、後述するメイヤスーのように思考と存在の相

関関係だけを対象とするのではなく、主体による構築の結果として客体を捉えるという営みの過剰＝構築主義こそが共通の問題とされるべきだとフェラーリスは述べている。

この観点に立つならば、実在を離れた人間主観による世界の作りこみ（構築）とその過剰が近代とポスト近代の思想基盤にあるということ、それゆえに我々はもう一度、人間主観を離れた実在＝モノそのものに立ち返らねばならないという志向性が、新しい存在論全体の動きを支えていると言える。

フェラーリスは、「認識論的現実」(Realität)と「存在論的現実」(Wirklichkeit)を区別し、後者は「我々が知っているか否かにかかわらず存在する…外在の世界である」と言っている。そして実在論を新たに次のように定義し直す―「リアリズムとは、自然的対象（可能性としては、そのつど特定される様々なタイプの対象も含めて）は我々がそれを知る手段から独立しているという信念である」(ibid., p.150)

“我思う”より先に存在している無数の表象があり (pre-existence)、また、“我思う”に抵抗 (resistance) する表象があるとも言う。フェラーリスはこの「抵抗」という概念を重視しており、同じ新実在論者であるM・ガブリエルのテーゼに対しても修正を求めている。ガブリエルは「存在するとは、意味の場に存在することである」と言うが、むしろ「存在するとは、環境において抵抗することである」とすべきであると、フェラーリスは主張している (ibid., pp.155f.) *。

*ガブリエルは『世界はなぜ存在しないのか』で話題になっているが、そこで言われている社会学的事項に関わる幾つかの事柄は、例えば、既にルーマンのシステム論などで指摘されていることでもある。だからガブリエルの説に新しさがないという訳ではないが、本当の意味でどこが真に新しいのかについては、いまだ吟味の時間が求められるような気がする。

ここで言われている「意味の場」に現れるということにしても、A・シュッツ以来の社会学の意味学派において長い理論的歴史のある考え方である。「世界それ自体が属する意味の場は存在しないので、我々は世界を把握することができない。世界は舞台に現れることはなく」(Gabriel, 2013, S.100)、「世界は世界の中に現れてこない」という結論に至るとしても、やや不安が残る。

フェラーリスは、リアルなモノの持つ「抵抗」という性質に注目し、「社会的なもの」についてもその見方を拡張してゆく。そして、社会的対象も主体に依存した主観的なものではなく、モノそれ自体だと言う。我々が意識せず認識していない時にも社会的対象は存在し、思いのままになるものではない。そこで「ドキュメンタリティ」という概念を導入し、「書き込まれたもの」として「心から独立した」社会的環境の基礎に据えている。

デュルケームの「社会的事実」と「モノ」、K・マンハイム知識社会学における「ドキュメントの意味」、そしてエスノメソドロジーなど、社会学理論から連想されるキーワードの広がり

大きい。ただ、NOは一般に「個体的対象」をオブジェクトと考えており、デュルケーム社会学で想定するような道德規範や宗教的信念などはオブジェクトとして想定していないようである。

NOにおいて「社会的対象」と呼ばれているのは、具体的な形を伴ったものを指しているようであり、単なる主観的对象物ではない。フェラーリスは「諸主体に依存する（しかし主観的なものではない）社会的諸対象も、…モノそれ自体だ」とも述べている」（Ferraris, 2015, p.158）が、その社会的対象というのがどこまでの範囲を意味するのか、詳らかではない。

社会学にとっては社会的な意味で「モノ」とは何かということが非常に重要な方法論的テーマとなるはずであるが、本稿ではNOの一般的見方に沿って、ひとまず「モノ」を個体的対象と捉えておきたい。

本稿の目的は、人とモノとが同列に見なされるという志向性を問いたいということにあるので、「社会的事実」とは何かという問題をNOと結びつけて検討することについては、さしあたりは禁欲しておきたい。この課題についてはとりあえず脇に置き、今は先を急ぐ。

7. 「プトレマイオスの反転」と主観：メイヤスー

モノ志向の哲学的基礎づけとして、新実在論以外にも「思弁的実在論」（speculative realism）ならびに「オブジェクト志向存在論」（object-oriented ontology）がある。前者はQ・メイヤスーとG・ハーマンらの立場であるが、ハーマンはその後「オブジェクト志向存在論」という独自の理論に移行している。

ラトゥールやフェラーリスの主張と重なる部分は多いが、この理論の特徴的な部分を概観しておきたい。

まずメイヤスーであるが、本稿における彼の理論的枢要は「相関主義」批判にある。先にフェラーリスの項でも触れたが、新しい存在論に共通する理論的特性として、この「相関主義」批判がある。これまでの思想界を支配してきたカント的な考え方、即ち、哲学は思考と存在の相関関係だけを扱えるのであり、存在そのものについては語ることができないという見方への根本的批判である。

メイヤスーの目論見は、近代哲学を支配してきた相関主義を超えて、その外にそれ自体として事物の世界が存在することを論証することである。しかしその論証過程の細部を辿ることは、本論にとってそれほど有益ではない。本稿にとってメイヤスーの理論の面白いところは、事物の世界の理論的証明よりも、モノに拘ろうとする姿勢と脱主観主義とである。

メイヤスーの相関主義批判は、今日、様々な理論領域で主張され始めている脱人間化とモノ志向の一形態として見るとき興味深い。ここではそれを「プトレマイオスの反転」という彼の独特

の主張を用いて整理しておきたい。

天文学においてコペルニクスが導入した“転回”はよく知られているが、メイヤースーはそれを「自然の数学化を主導した、はるかに根本的な脱中心化、即ち、認識過程の内部における、世界に対する思考の脱中心化」(Meillassoux, 2006, pp.171f.)として捉え直し、その上で、カントがそれをまた“反転”(contre-révolution)させたのだとする。

カントが哲学的認識において唱えた「コペルニクスの転回」は、実際には、自然科学的認識においてコペルニクスが遂行したことの逆だと言うのである。カントが行ったことは「逆に、主観・主体(sujet)が認識過程の中心にある」(ibid., p.175)ということだから、である。

地上に居る人間を中心として天空が動いているというプトレマイオスの宇宙観から、人間の方が動いているという見方にコペルニクスが転換したはずなのに、カントは再び、人間主観が世界認識の中心にあるかのような思考法を導入したということである。そしてその後の哲学は、科学によってもたらされるものとは異なる、より深く根源的な別の意味、即ち「相関的な意味」を云々するようになったのだと言う。

8. 「上方掘り崩し」批判：ハーマン

ハーマンとメイヤースーは共に「思弁的實在論」として括られるが、ハーマンは独自に「オブジェクト志向存在論」を唱えている。メイヤースーとの相違点は、人間がモノ自体に直接的にアクセスできるかどうかという問いに対する答えにある。メイヤースーの立場は「思弁的唯物論」とも言われるが、「思弁的唯物論はイエスと答え、オブジェクト志向存在論はノーと答える」(Harman, 2011, p.171)。

メイヤースーは数学的論証などを通じてモノ自体とアクセスする通路を見出そうとしているが、ハーマンは「外的世界は人間の意識から独立したものとして存在している」とする(Harman, 2018, p.10)。

その点ではカントと同様にモノ自体は人間によって直接的には捉えられないものに留まるが、「しかしそれは、人間だけがそれに失敗するからではない」(Harman, 2011, p.171)。人間とモノはフラットな存在論的位置にある。それゆえ、人間と世界との関係のみを何か特殊なものであるかのように扱うことは、もはや哲学の中心的課題ではなくなる。

ハーマンによれば、モノ自体へのアクセスを模索するメイヤースーの立場は、まだ人間が中心にあって、そこから世界にアクセスしようとする「人間が中心に留まっている哲学」の域を脱していないということになる。

ここで、モノと人間主体との関係を考える上で、「下方掘り崩し」と「上方掘り崩し」というハーマンの用語に触れておきたい。「下方掘り崩し」(undermining)とは、「オブジェクト自体は薄っぺらなものであり、リアルな活動は個別的事物の深層で展開するのだ」という考え方であ

る。一方、「上方に掘り崩す」(overmine)とは、オブジェクトそのものなどというものは存在せず、「それが観察者に対していかに現れるか」であり、対象同士の相互関係だけがあると見る立場である (ibid., p.172)。

ハーマンはそのどちらの見方も退け、「オブジェクトは相互に独立した存在 (autonomous) である」と言う*。

*更にハーマンは、オブジェクトは我々がそれと取り結ぶ関係以上の汲み尽くせぬ余剰 (surplus) を保留しており、またオブジェクト同士が直接的に触れ合うことはなく、オブジェクト同士は互いに「隠退」(withdraw) し合うと言う (ibid., p.174)。

この二種類の「掘り崩し」についての論考は、ラトゥールとの関わりで面白い論点を提供するものである。

ハーマンはラトゥールが「あるモノが何であるかということと、それが何をするかということの差異を見失っている」(Harman, 2018, p.109) と批判している。ANTにおいては「全ての事物がその性質において同等であるという考えにあまりにも深く拘り過ぎるがゆえに、歴史的存在の(生態学的というよりは伝記的な) ライフサイクルを説明することができない」(ibid., p.112)。ANTでは、何であるかによって実在が定義されるのではなく、それが何をするのかによって定義されてしまっているということである。

そういう意味で、「初期ラトゥールの哲学が典型例であるような完全にフラットな存在論」(Harman, 2011, p.177) とハーマン自らの立場とを区別している。あくまでも初期ラトゥールという限定付きではあるが*、全てのアクターを等しくアクターとみなすことで、「ラトゥールはリアリティの範囲を不条理なほどに拡張しているように見える」(ibid., p.178) と言う。

*ラトゥールの理論には「初期と後期の断絶」が存在し、だんだんと自らを哲学者として再規定するのに伴って、次第にメタ理論への志向を強めつつあるとも指摘される(例えば、Jensen, 2017, p.537)。また人類学者のヘナレは、ラトゥールに賛同しつつも、彼が言うような意味でのハイブリッドなネットワークとは違って、「何もかもが作用する訳ではない場合もある」として、ラトゥールの「統一的」理論とは異なった認識を提示している (Henare, et al. 2007, p.7)。

ラトゥールは「社会」(あるいは権力・階級・イデオロギー等の諸概念) という言葉によるショートカット的説明を嫌いつつ、人間と非人間・モノとが組み合わさって科学的事実が社会的に構築されるというフラットな存在論に立っている。しかしハーマンから見れば、ANTの立場は「上方掘り崩し」の一例であり、実在を関係へと還元してしまう関係のアプローチであるために、オブジェクトの「隠退」を適切に扱うことができないということになる。

そして、関係主義へのこの批判はJ・デリダにも及んで行く―「デリダにおいては全てが差異の連鎖とシステムに捕らえられているがゆえに、オブジェクト志向存在論とは反対に、このシステムから独立した自律的なリアリティが存在しない」(Harman, 2018, p.203)。

9. フラット・オントロジーの両義性

これまでの検討で、いわゆる「新しい存在論」が相關主義と構築主義を批判しつつ、人間主観の特権性を剥奪し、モノと人間とが同等のアクターであるような世界観を提示していることの把握はできたと思う。

しかし、この「新しい存在論」に通底するフラットなオントロジーは両義性を抱えている―(あるいは、結果としてフラットではないという意味で、パラドクスと呼んでよいかも知れない)。モノと人間を同等に扱うということには、“経験的”には二つのベクトルが潜在しているからである。一つは、人間をモノ化するという方向。もう一つは、モノを人間化するという方向。

勿論、新しい存在論の諸派は、そのどちらにも偏らないことを目指しているはずであるが、“同等”という概念はパラドキシカルである。モノであれ人間であれ、それを認識しているのが人間であるならば、完全にフラットなオントロジーは困難である。必ずや、モノの人間化か、人間のモノ化への偏りを生まざるをえない。

ラトゥールならば(モノと人間の)“ハイブリッド”な協業体としてのネットワークという言い方をするだろうが、ハイブリッドという用語によってこの両義性が解決される訳ではない*。

* I・ハッキングは「ラトゥールの科学社会学は、自然に対してあまりにも過大な主体性を割当てているように見える」と批判している(Hacking, 2002, p.17)。

ハイブリッド(=異質なものの混成物)という言葉は、モノと人が異質なものとしてあることを前提としているとも受け取れる―ラトゥールは、自らが排除しようとした二元性を、逆に温存してしまうような理論体系に移行しているという批判がある。

いずれにしてもANTにおいては、モノと人との区別がどのようにあるのか(ないのか)は依然として不明なままである。この点は、他のNOにおいても同様の状況である。

社会現象的には、その種の偏りに無頓着な平板的世界観の一つの姿として、人間とモノとの振る舞いを同質・同等のデータとして収集し、AIにそれを判定させるというような手続きもあり得る。これは監視社会論の文脈でしばしば批判的意味合いで言及されてきた方向性である。近年、「Society5.0」などの言い方で登場しつつある社会観は、このような意味での情報論的にフラットな存在論を前提にしている。ビッグデータの収集とAIによる判定が進む世界では、人間とモノ

ノとはデータとして同等の存在になる。だがその場合には、「宇宙における人間の地位」(M・シェーラー)は悲惨なものになるかも知れない。

もっとも、このようなAI的、「Society5.0」的世界観と比較すると、NOの多くは、人間やモノをその属性データに分解することなく、モノそのものの実在性を強調しようとしている。したがって、NOの見方はAI的な“データの勝利”とは異なっているはずである。

とは言うものの、NOと「Society5.0」の世界観には何がしか通底する部分があるようにもまた感じられるが、本稿では、まだこの点についてきちんと論ずる用意ができていない。別稿を期したい。

NOの目指すものが、単に「人間」の地位を引き下げることだけならば、フーコーやルーマンが批判的に検討してきた理論的課題を、実践的レベルで科学方法論として採用するというに過ぎない。だが、新しい存在論が目指しているのはそんな単純なことではないはずである。モノそのものの実在性を把握するということが強く志向されているからである。

しかしながら、モノそのものの実在性とは何なのか。残念ながら、そのことについて満足のゆく解答をあたえているフラット・オントロジーは(今のところ)見当たらないようである。人間とモノとが同等の存在者であることが宣言され、人間主体の地位がモノに篡奪されるのであるが、「オブジェクトが空から落ちてくるかのように議論を進めるオブジェクト志向存在論や思弁的実在論の解釈」(Jensen, 2017, pp.532f.)の前で、我々は戸惑いを隠せない。

小括：モノと人間

随分と回り道をしてしまったかも知れない。前稿で行った、ラトゥールとANTの社会学的検討を皮切りとして、モノの理論を理論的に詰めるために、近年になって台頭しつつある新しい存在論の諸派に目配りせざるを得なかった。粗削りのノートではあるが、今後の社会学的検討の準備作業として、新たな存在論諸派の見取り図は描けたと思う。

次稿ではこの準備作業を踏まえて、現代社会のモノ志向を、〈主体とモノと社会〉についての社会学理論史と関わらせ、人間と主体そしてモノと社会の位置を検討して行きたい。その際に念頭に置かれるのは以下のような社会学的状況認識である。

現代社会においては、個々人の意識が私秘化し個人化する一方で、他者との協働によって構成される「社会」は社会的なものの内実を曖昧化させつつある。その流れを受けて、「社会的なもの」は、社会という実体的概念を避けて、ネットワークとして捉えられるようになってきた。

ANTなどが主張するネットワークは、N・ルーマンが社会を“コミュニケーションのネットワーク”と規定したことや、J・ハバーマスが“コミュニケーション的行為”の概念で示したも

のよりも、モノ志向と脱人間主体と言う点で、もっと踏み込んだものになっている。そこではネットワークを構成するのは、単に人だけではなく、組織、人、モノを含めた、多様な要素である。

モノの溢れる情報化された消費社会において、モノは単なる個物としてよりはネットワークの一部（あるいは情報の結節点の一つ）として、いわば擬似的な主体として認識される傾向を強めつつある。他方で人間は（自己も他者も）モノと同じように、それ自体が情報の一つに過ぎないような形で、疑似的な主体として、その疑似性においてはモノと同等の在りようで存在する傾向を強めているのではないか。

但しこの擬似的人間主体は、決してベックやギデنزが言うような流動的で分割可能な「擬似主体」であるだけではない（ベックの疑似主体とラトゥールの準客体についての比較は、三上〔2019〕で触れたが、より詳しい検討は次稿で行うことになる）。むしろ、人とモノを含めた全ての関係物が擬似主体化（＝疑似客体化）していると言える—セールの用語を使うなら《準主体／準客体》。

ポスト近代的潮流の中で、人もモノもそのアイデンティティを流動化させ、リキッド・モダニティ（Z・バウマン）の情報化と差異化によって、それぞれがフラットな存在となりつつある。そしてこれが相關主義批判に繋がっている。だが同時に、単なる差異や情報ではない、そしてフラットであるだけではない、モノの実在性を求めようとする動きが、構築主義批判の衣をまとって、相關主義批判と同伴している。

NOの潮流は脱人間化という共通の土台によって下支えされ、それがモノ志向へと方向づけされている。NOを取り巻く状況を（哲学的吟味という視線を少し離れて）俯瞰するならば、このような社会的構図が見て取れる。次稿では、この構図の中で、人間とモノ、主体と客体、そして社会といった概念がどのような意味を持ち得るのか、この点を更に詳しく検討したい。

【引用文献】

欧語文献からの引用文は、全て筆者が原典から訳出したものであるが、必要に応じて、代表的翻訳文献も参照した。

Ferraris, M., 2015: New Realism, A Short Introduction, in F.Gironi et al. eds., *Speculations VI.*, punctum books.

Gabriel, M., 2013: *Warum es die Welt nicht gibt.*, 9Aufl., Ullstein. 清水一浩訳、『なぜ世界は存在しないのか』、講談社、2018年

Gad, Ch. & Jensen, C.B., 2010: On the Consequences of Post-ANT, *Science, Technology & Humann Values* 35-1.

Hacking, I., 2002: *Historical Ontology*, Harvard Univ., Press. 出口・大西・渡辺訳『知の歴史学』、岩波書店、2012年

- Harman, G., 2011: *The Road to Objects*, *Continent* 3-1.
- Harman, G., 2018: *Object-Oriented Ontology, A New Theory of Everything*, Pelican Books.
- Henare, A., Holbraad, M., Wastell, S., eds., 2007: *Thinking through Things*, Routledge.
- Jensen, C.B., 2017: New Ontologies ? Reflections on some recent 'turns' in STS, anthropology and philosophy, *Social Anthropology* 25-4.
- Latour, B., 2005: *Reassembling the Social, An Introduction to Actor-Network-Theory*, Oxford Univ. Press.
伊藤嘉高訳、『社会的なものを組み直す』、法政大学出版局、2019年
- Meillassoux, Q., 2006: *Après la finitude, Essais sur la nécessité de la contingence*, Seuil. 千葉・大橋・星野訳、『有限性の後で』、人文書院、2016年
- Müller, J., u. Lorenz, L., 2016: *Niklas Luhmann*, Fink.
- Schulz-Schaeffer, I., 2000: Akteur -Netzwerk-Theorie, zur Koevolution von Gesellschaft, Natur und Technik, in Weyer, J.(ed.), *Soziale Netzwerk*, Ordenbourg Verl.
- Serres, M., 1980: *Le parasite*, Hachette Littératures, 1997. 及川・米山訳、『パラジット』、法制大学出版局、1987年
- Strathern, M., 2004: *Partial connections*, updated edition, Rowman & Littlefield. 大杉・浜田・田口・丹羽・里見訳、『部分的つながり』、水声社、2015年
- 春日直樹、2011：「人類学の静かな革命—いわゆる存在論的転換」、春日直樹編、『現実批判の人類学』、世界思想社
- 『現代思想』、2019：「現代思想の総展望2019 ポスト・ヒューマニティーズ」、第47巻第1号
- 松村圭一郎、2011：「所有の近代性—ストラザーンとラトゥール」、春日直樹編、『現実批判の人類学』、世界思想社
- 三上剛史、2019：「『社会』の学とアクター・ネットワーク理論—モノドロジーとモノの理論」、『追手門学院大学社会学部紀要』、第13号